



東京大学総長
濱田純一さん

はまだ・じゅんいち／法学博士。灘高校、東京大学法学部卒業。東京大学新聞研究所助教授、教授、社会情報研究所教授、東京大学社会情報研究所所長、東京大学大学院情報学環教授、東京大学大学院情報学環長・学際情報学府長、理事・副学長を経て、2009年4月から現職。著書に『メディアの法則』（日本評論社）『情報学辞典』（共著：弘文堂）など。

東大では具体的にはどのように取り組んでおられますか？
濱田 現状（2013年5月時点）では学部生1万4000人のうち留学しているのはわずか91人、1%未満です。これを、4学期制を導入し、海外の大学と学期の時期を合わせて留学しやすしたり、6、7月を夏季休業期間に繰り込むことなどで海外のサマープログ

ラムに参加できるようにして、留学を増やします。また、FLYと呼ぶ初年次長期自主活動を使って留学することも可能です。
石井 FLYというのは新入生だけが対象ですか？
濱田 そうです。入学してすぐに休学をして一年間のさまざまな自主的体験をするプログラムです。計画書を提出してもらい教員が審査

をして認められることが必要です。
石井 普通に休学して好きなことをするのと何が違いますか？
濱田 このFLYの1年間は普通の休学期間にはカウントされません。通常は4年の学部であれば8年が最長ですが、FLYの1年は別勘定なので9年まで学校にいられます。また、担当教員がつき学生指導をしますし、最大50万円の資金援助もあります。今年4月から始めましたが、今年は11人が審査をパスして活動を始めました。
石井 このFLYの目的は？
濱田 FLYは必ずしも海外に留学しなければいけないわけではありません。「国内でボランティアをする」でも構いません。要は、大学での学習をスタートする前に、社会経験をして問題意識を培う機会を与えたいのです。東大生は学力では日本一ですが、それで満足してはいけません。東大の学生の实力をもっと伸ばしてもらうためのプログラムです。
石井 英語の教育としては、英語による授業科目を現状の3倍に増やすという目標と聞きました。
濱田 はい。英語の授業そのものを増やすこと、すでに行っている大学院での英語の授業を学部生にも開放

することなどで増やそうとしています。先を見据えると、コアの授業の多くを英語で行われるようにしたいと考えています。理系や経済学部は概ね支障がないと思います。法学部でも法哲学や国際政治などは英語で授業をしても大丈夫でしょう。ただ、日本法や国文学などは日本語での授業ということでしょうね。また難しいのは、たとえば東大の物理は世界でもトップクラスの水準ですが、その水準の内容を日本人の学生に英語で教えると、日本語で教える場合に比べて理解度が落ちてしまう。だから、学部・学科によっては、学部では日本語で、大学院は英語でということになるかもしれません。
「強靱な開拓者精神」を養う
石井 先生は「タフな東大生」の定義として、①国際的な視野を持つこと、②強靱な開拓者精神を持つこと、③公共的な責任を自ら考え行動することの3点を挙げていらっしゃるようですが、特に二番目の強靱な開拓者精神というのが難しいと思うのですが……
濱田 「タフな東大生」はカリキュラムの内外で培います。タフさの

グローバル社会で求められる3つの力 将来の子どもたちへのメッセージ編

東京大学総長・濱田純一さんに聞く

2025年の未来に必要なとされる タフな子を育てる教育とは？

一昨年、東京大学（以下、東大）が検討を始めた秋入学構想は今年6月に当面見送りが決定したが、大学関係者や子どもを持つ親たちなどに強烈なメッセージを投げかけ、議論を喚起したことは間違いない。2015年度から4学期制を導入することになったが、いざいにする、「このままではいけない」という東大の危機意識の表れだ。その東大の総長・濱田純一さんに、これからの子どもたちに求められる力とは何か、東大は何を目指しているのかを聞いた。



取材
アンテナ・プレススクール校長
石井至さん

いしい・いたる／当誌アドバイザー。駐日ルワンダ共和国大使館特別顧問、関西大学経済・政治研究所研究員、東京都市大学付属小学校評議員などを務める。著書に『慶應幼稚舎』（幻冬舎新書）など多数。

「よりグローバルに、よりタフに」

石井 今年7月に東大は「総合的な教育改革」を発表しました。一言で言えば、研究だけでなく教育でも世界トップクラスを目指し、教育の中心は「グローバル化した世界で活躍するタフな東大生を育成する」というのが要点だと思いますが、それでよろしいですか？
濱田 その通りです。私はいつも「よりグローバルに、よりタフに」をスローガンとして言っています。今回のテーマである2025年と

いうことで言えば、「グローバルでタフなのは当たり前」になっている時代だと思っています。ただ、私が考える「グローバル」は世界的に活躍することだけを意味しません。多様な価値観と付き合うことがグローバルの本質と捉えています。そして、その多様なものを自分の生き方に取り込んでいくことが大事です。仮に活躍する場所が日本国内でも、こうしたグローバルな力は生かされます。
石井 国際的な観点では、「国際経験を持たせる」「英語を使えるようにする」の二つが第一歩ですが、

TOPIC
3

「チャレンジカップ 2013」グランプリ決定！

チャレンジ体験が 子どもを伸ばす

小学生から高校生までの子どもたちが、自分で決めた目標に挑戦し、その結果のみならず、プロセスを発表し合う大会がある。

目標に向けてチャレンジする過程において、子どもたちは自分自身が成長していることに気付くことができる。



審査員
元プロテニス選手
杉山愛さん

「私の経験から言えることは、目標が明確であればあるほど頑張れるということです。自分と徹底的に向き合い、長期的目標、中期的目標、短期的目標を設定しているところが、みんな素晴らしい」



審査員
元プロ野球選手
小宮山悟さん

「うまくいくか・いかないかではなく、挑戦することこそ大事なことです。まずは一歩を踏み出してみる勇気をもってほしいと思います。僕も『あんな大人になりたいな』と思ってもらえるように頑張りたいと思います」



司会
NPO学習
学協会理事
本間正人さん

「第1回から毎年司会をさせてもらっています。毎回ドラマがあります。未成功と失敗は違います。大切なのは成功するまでチャレンジを続けられるかどうか。そんなことを学べる素晴らしい大会だと思います」



応援に駆けつけた、日本唯一のプロ応援団「我武者羅応援団」と記念撮影。

チャレンジ精神と 折れない心を競う大会

挑戦のプロセスを競い合うというユニークな大会がある。一般社団法人日本チャレンジ教育協会が主催し、株式会社FCエデュケーションが事務局を運営する「チャレンジカップ」だ。今年で6年目。ルールは簡単。半年間の中で、自分のチャレンジを決め、その成果はもとより、むしろそのプロセスにおける試行錯誤や葛藤を発表するというもの。

チャレンジの内容はさまざま。「クラスみんなで、全国模試の偏差値県内1位を目指す」というものから「いじめに打ち勝ち、憧れの

中高一貫校合格を目指す」というもの、「手話で心を通わせる。多くの人に手話を広める」というものまで。プレゼンテーション中、つらかったチャレンジの日々を思い出し、思わず涙がこみ上げるシーンも。

大会を始めるに至った想いを、日本チャレンジ教育協会の鈴木甲子雄代表に聞いた。

「今まで自分の限界に挑戦したことがない子どもたち、自分自身と真正面から向き合うことに抵抗があった子どもたちに対して、目標を決め、それに挑戦する過程でさまざまな困難や自分の限界を突破するような活動を通じ、自分の人生を自分で切り拓ける人間になっ

てもらおうきっかけを提供したいと考え、チャレンジカップを始めました。受賞する子どもたちは特別な子どもたちではありません。『今の自分に自信がない』『私はどうせ頑張っても無理』と半年前まで言っていたごく普通の子どものたちが、大勢の前で自分の活動の成果を堂々と発表しているのです。失敗することを心配する必要はありません。長い人生で『打率10割』のバッターはいません。人生においては、『未成功経験』も『大きな財産』です。自分を変えるチャンスはいつでも、すぐそばにあります。一人でも多くの子どもがチャレンジする気持ちを大切にしてくれればうれしいです」



最大のポイントは「粘り強さ」「辛抱強さ」だと思います。授業を双方向型にすることで、相手の考えを理解する、自分の考えを理解させるプロセスを通じて粘り強さを鍛えます。理科の実験もそうです。授業以外では、いろいろな経験を積ませることが重要。自分が当たり前だと思っていることが、他の人にとっては当たり前ではないことはよくあることです。そこで、そういう経験が大事です。そこで、どうしようかと考え、今までの知識・経験を必死で動員し、リスクも覚悟しないといけない。そういう状況を体験してタフさは生まれます。

石井 具体的には？

濱田 去年の夏から、「体験活動プログラム」というものを始めています。昨年は海外での13件を含む計47件のプログラムを用意し、176名の学生が利用しました。マレーシアの障害児施設のワークキャンプへの参加、パリのOEC本部の見学、国内では青森で農業体験や漁業体験、被災地でのボランティアなどがありました。「開拓者」とは、何かを新たに作り出す人を言いますが、これらの体験活動が「開拓者」の芽を育むと考えています。

石井の アフターインタビュー

気さくなお人柄の濱田さんから、インタビューで紹介しきれなかったこともいろいろ教えていただいた。私の素朴な疑問として、東大教授でグローバル人材を育成できるのか、育成できるように教授自身が変化する必要があるのか、という問いには、「まさにその通り」と賛同し、東大教授は学者としてグローバルに活躍しているが、その活躍ぶりを学生には伝えていないと反省していた。

一方、「教育の重要性」は建前でなく実感していると言う。大学院進学志望者が減っているのだ。

また、私は個人的に教養こそが不確実な世界をサバイブする切り札だと思っているが、それには濱田さんも同意見だった。マニユアル化された知識は必要だが、それだけでは変化している時代に通用しない。幅の広い教養こそが、未体験の状況に対応する力、試行錯誤する力を生み出すということだ。東大の推薦入学導入も話題になっているが、センター試験の導入で最低限の学力を担保させると言う。今後の東大から目が離せない。